

目し、SPの成立過程を論じたものである。

法華経成立研究については、布施浩岳『法華経成立史』以来、あらゆる研究者の論述があるが、未だにその結論に至っていないと考えられる。そこで、SP成立過程を解明すると考えられる手がかりを提示してみたい。

まず、SPに現れる *śūnya*, *śūnyatā*, *anupatikadharmakṣānti* の用語について、着目し、検証してみたところ、以下のようになる。SPに見られる *śūnya*, *śūnyatā* の用語が現れるすべての箇所に着目すると、原始仏教における空（第3章第12偈で初出し、第10章の SP 234.10 まで現れる）、梵文八千頌般若経（以下では「ASP」という）の空（SP 第5章で現れるが『妙法蓮華経』には相当箇所が見当たらず、『妙法蓮華経』と SP にあるのは、第13章後半（SP 277.11）で初出し、第13章第19偈まで現われ、これ以降に現れない）にはつきりと SP が分類できるのである。また、ASP に特有な空の概念のひとつである *anupatikadharmakṣānti* に着目すると、『妙法蓮華経』に相当箇所がある SP では、第11章（SP 266.1）に初出し、第23章（SP 437.1）まで現われている。したがって SP は歴史的阶段を経て編纂されたといえよう。

また、*saddharmapuṇḍarīka*, *dharmaparyāya* の用例を検証すると、*saddharmapuṇḍarīka* が引用されている章には、すでに SP の存在が認められていることになるから、これが現れず、*saddharmapuṇḍarīka* を意味しない *dharmaparyāya* 以外で、*dharmaparyāya* が現れていないのが、より古い SP となる。その SP は、第2章と第5章である。

以上のことから、SP は歴史的段階を経て編纂され、その中でも最も古い章は、第2章 *Upāyakaśalya*（『妙法蓮華経方便品第二』に相当する）と考えられるのである。

バーヴィヴェーカによる自性 (*svabhāva*) 批判

兼子 直也

本稿の目的は、バーヴィヴェーカ著『知恵の灯火』(*Prajñā-pradīpa*, [D]) 第十五章の論述を中心に検討して、空性証明において否定される諸事物の自性が、彼にとって何であったのかを説明することである。

従来、ナーガールジュナの主要な論敵は説一切有部と考えられており、自性は有部の重要な概念の一つである。有部の教理では、世俗の事物を構成する要素はダルマという不可分な真実在であり、各ダルマに自性が規定されている。そして、自性はダルマそれ自体と考えられている。しかし、バーヴィヴェーカは、後述するように自性を「もの」と「性質」という形で理解することによって、それに異なった意味を付与するとともに、自性を、中観派の二諦説の枠組みで論じた。有部の自性の概念は彼によって批判的に検討され、大幅に再解釈されたと考えられる。

バーヴィヴェーカの自性理解には、二諦説と関連して二段階があると想定される。その二段階とは、最高の真実に適う本来的な自性と、言説上の自性である。その理由は、『中論』第十五章では、自性という概念自体を説明した第一、二偈と、他性との関係で自性を説明した第三、四偈との間に微妙な意味内容の

相異があるからであるが、バーヴィヴェーカは、その相異に即して、二段階的な自性理解を展開したと考えられる。

まず、本来的な自性を検討する。バーヴィヴェーカは第一偈に註釈するにあたり、最高の真実として、あるものが特定のあり方で自体的に存在している場合、それには生起はありえないと指摘する。そして、自性とは固有な性質／存在であり、それ自身の本質だと定義する(一五七b三)。続いて第二偈への註釈で、自性の無依存性から「特定の言語表現を持つ他の基体に依存しない」性質を導出する(一五八b三)。これは本来的な自性が言語表現不可能であることを示唆していると考えられる。従来、『知恵の灯火』は、言説においては自性を肯定し、最高の真実においては自性を否定するものと解釈されてきた。しかし、バーヴィヴェーカの理解する最高の真実における自性は、単なる否定対象ではなく、何らかの無規定的で言語表現不可能なものを意味すると理解すべきかも知れない。

次に、言説上の自性を検討する。これには、文脈から「固有の本性」と、他性と対置される「それ自体」という二つの意味内容が考えられる。前者の事例には火の熱さが当てはまる。この熱さは原因と条件によって作られたものだが、他のものの中にないから自性と呼ばれるため、実は慣習上のものと結論付けられている(一五八a六)。この場合、自性は事物の性質なので、固有の本性と解しうる。同様の事例は、第三章にも見られる。第三章では認識器官が特定の対象領域群に働く本質的機能が自性として考えられ、それは言説においてのみ肯定されている(七五b六以下)。他方、後者の事例は第四偈の註釈に登

場する。この文脈では、他性は原因という事物であり、自性は現にある結果である事物自体であるとされている(一五九a五)。従って、この自性は、或る事物を再帰的に呼ぶ「それ自体」だと了解されよう。この他性と対置された自性のあり方に関して、第十四章に重要な指摘がある。それは、相互依存的に「一方」と「他方」が成立するのは言説上であり、両者は特定の言語表現を持つ基体に依存する性質を有するというものである(一五四b一以下)。この指摘に従えば、第十五章第三、四偈の他性との関係で成立する自性は言説上のものになる。従って、それとは反対の本来的な自性は、最高の真実として「ある」とは筆者にはまだ言い切れないが、言説上の自性の規定に適合していないのは確かである。

アティシャの顕教文献において言及される密教文献

望月 海慧

アティシャ(デーパンカラシュリージュニヤナ)は、『菩提道灯論』を著し、チベットに仏教を伝えた者として知られているが、インドのヴィクラマシーラ僧院の学僧としても知られている。それ故に、彼の著作を調査することにより、同僧院における經典の収蔵状況を推測することができる。今回は、彼の顕教文献における密教文献の引用を調査し、彼が密教文献を一般にどのように扱っていたのかを明らかにする。

『菩提道灯論』では、真言乗のセクションにおいて、『從勝初仏出現タントラ』が言及され、修行者に対する波羅蜜乗と真言乗の明確な区別が述べられる。